

社会科指導における地域の教材化

—内面的なやる気の育成に視点を当てて—

(平成28年8月29日提出, 11月4日受理)

Teaching Materials of region in social studies teaching
—Focuses on the cultivate intrinsic motivation—

王寺町立王寺南小学校

山田 均

YAMADA Hitoshi

Oji Municipal Oji Minami Elementary School

キーワード：地域に根差す社会科, 内発的な意欲, 次期学習指導要領

Abstract : The social studies were founded as a core subject of the postwar democracy. Its purpose is to young people to understand the life in society. And, To have the ability and willingness of young people to create a better society. In order to achieve this, we have to cherish it to learn the region. And, it will also be raising the intrinsic motivation of children. Now, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Ministry is considering the following course of study. The future can not be predicted is coming. So, we raise the quality and ability to survive in the future to our children. I considered importance of the learning that assumed an area the teaching materials.

Keywords : regional study, intrinsic motivation, the next course of study

1 はじめに

1960年代後半から1970年代にかけて, 社会科教育において「地域に根ざす教育」が各地で展開されていた。代表的な実践家として, 若狭蔵之介(東京都練馬区立大泉学園小学校 日本生活者連盟)や鈴木正気(茨城県日立市立久慈小学校 教育科学研究会)が挙げられる。

若狭は「地域にある産業活動や自治活動などを見つめさせ, 彼らがそれらに問いかけ, 働きかけ, そして地域での生活を意識化していくこと」⁽¹⁾(「問いかけ学ぶ子どもたち」1984年あゆみ出版)を促す実践を行ってきた。また, 鈴木は「実物と対面すること, ものをつくること, 観察・調査をすること」⁽²⁾(「川口港から外港へ」1978年草土文化)を重視した実践を行ってきた。

両者の社会科実践の背景には, この時期, 政策として行われていた経済の高度成長と地域の開発により, 地域や地域社会, そして地域の人々の生活が急速に変化していていること, 言い換えれば, それまでの地域社会でのつながりや伝統・文化, 産業というものが失われていく中で, 子どもたちの生活も劇的に変わり, 多くの問題が生じていることに対する危機感があった。そこで, 地域や子どもの生活現実に根ざし, 民主的な人格を育成することをめざした社会科教育に取り組んだのである。

こうした地域に根ざした社会科教育は「地域社会科教育プラン」として, 全国で作成されていた。代表的なものに, 埼玉県川口市の「川口プラン」をはじめ, 「北条プラン」(千葉県館山市北条小学校), 「明石プラン」(兵庫師範女子部附属小学校), 「西条プラン」(広島県東広島市西条小学校)などがある。私が勤務している

奈良県でも、「奈良プラン」(奈良女子高等師範学校附属小学校)、「桜井プラン」(奈良県桜井町三小学校)などの地域プランや学校プランが作成され、それに基づく社会科教育が取り組まれた。これらの取組がその後の奈良県社会科教育に大きな影響を与え、現在でも、奈良県教科等研究会社会科部会では、地域に目を向けることを重視した社会科の実践が行われている。

前述したように、地域に根ざした社会科教育が全国的な広がりを見せたのは、我が国が高度経済成長期を迎え、社会が大きく変化した時期である。それは、社会の変化が激しく見通しが持ちにくい時期こそ、子どもの生活の基盤である地域に目を向け、自らの生活実態と社会科の学習内容を関連付け、社会的事象を自分ごととして捉え、課題を把握し、その課題の解決に向けて考え、価値判断していくという学習が重要だからである。

さて、現在、我々は世界でも類を見ない少子高齢化に直面するとともに、グローバル化の進展やICT化をはじめとした社会構造の変化、不透明な経済状況等々、将来への見通しをもちにくい社会に生きている。まさしく社会が大きく変化している時期である。折しも、次期学習指導要領改定の作業も大詰めを迎え、新しい教育の在り方についての骨格も固まってきている。そのような教育の動きを視野に入れつつ、社会科という教科の特質を見失うことなく、これからの社会科教育における地域を対象とした学習の在り方について考察していきたい。

2 社会科という教科の特質

社会科という教科の特質と地域を教材等とする意義については、昭和22年度学習指導要領(試案)社会科編の「序論」に、すでに示されている。「序論」における地域を教材とする意義にかかわる箇所を、筆者が抜粋し要約して、以下に紹介する。

新しく設けられた社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を養成することである。

社会生活を理解するとは、その社会生活の中にあるいろいろな種類のことがらの、相互依存の関係を理解することが、最も大切である。そして、この相互依存の関係とは、①人と他の人との関係、②人間と自然環境との関係、③個人と社会制度や施設との関係の3つである。

つまり、社会生活を理解するには、上記の相互依

存の関係を理解することが不可欠であり、その相互依存の関係を理解するには、人間性の理解が必要となる。社会生活の根本に、人々の願いがひそんでいることを忘れ、ただ現象としての社会的事象のみを理解しても、それは真に社会生活を理解しているとはいえない。社会科の狙いは、人と社会の相互依存の関係を理解させようとするのであるが、それと同時にこのような知識を自ら進んで求めるようなものの考え方や学び方にも慣れる学習である。

社会生活がいかなるものかを理解させ、これに参与し、その進展に貢献する能力態度を養うということは、そもそも教育全体の仕事である。今後の教育、特に社会科の役割は、民主主義社会にふさわしい社会人(公民的資質を備えた人材)を育て上げようとするのである。社会科は、その目的を達成するため、子どもにとってリアリティーのある現実社会である、子どもの生活する「地域」を学習対象とし、「地域」を学習の場として学ぶことを重視するものである。

次に「序論」に述べられたことを、具体的に現在の学校教育の現状や子どもの実態に合わせて、地域教材の今日的な意義について論じることとする。

3 地域を取り上げて学習することの今日的意義

地域を取り上げて学習することの意義について、奈良県小学校教科等研究会社会科部会は次のように提案している⁽³⁾。

- ・子どもにとって身近な存在であり、具体的な事実認識に基づく思考・判断の場面が設定できる。
- ・現実の社会であり、子ども自身の生活にかかわりを持ちながら問題解決を図る学習が展開できる。
- ・地域の問題にとりくむことによって、地域社会の一員としての自覚も高まり、公民的資質の育成にもつながる。
- ・地域の人々の営みにふれることで、共感的な理解から、自分の生き方とかかわらせて考えることができる。
- ・観察、見学・調査等の体験的な活動が可能で、具体的に社会事象を確かめる方法が学べる。
- ・地域の教育力に依拠して、学校と地域が共に子どもを育てることができる。

筆者は上記の考えかたに賛同するが、さらに地域教

材の学習とそれによる子どもの内面世界の形成過程との関連に視点を当てつつ、筆者の考えを追記する。

①子どもの興味・関心を高める

地域とは、子どもにとってそこで生き、住み、学び、遊び、…かけがえのないものが存在する特別な場である。そのため、子どもの学習対象として、自分なりの問いや、自分なりの必然性を持った課題意識を持ちやすいと教材といえる。つまり、地域教材には子どもの内発的なやる気(興味・関心)を育てる要素が、多く含まれていると考える。

②直接体験により子どもの感覚を磨く

地域教材は、子どもにとっても、極めて具体的であり身近なものである。具体的な事物について五感を通して繰り返し観察・調査活動することにより、子どもの感覚を鍛えることが可能である。子どもの内面を揺さぶり育てるのはこのような体験の繰り返しである。頭の中だけの知的な領域に限定された活動だけでは、子どもは自分なりの実感も納得もほとんど得られないだろう。子どもの感性も感情も総動員した全機能的な全人的な直接体験こそが「ひとつとでない」「自分にとって意味あるもの」として事象を受け止めることができると思う。

③直接観察を通して、比較・分析力を育てる

直接体験することとは、子どもがリアルに繰り返し観察することができるということである。それにより事象を観念的に認識するのではなく、科学的に認識することが可能になる。さらに観察して実感し納得した具体的な事実を自分ごととして、比較したり、統合したり、関連付けたりして、共通点を見いだすことができる。このようなことを通し授業に対しての「内的なうながし」が生じると思う。この「内的なうながし」について梶田(2014年)は「一つの課題意識なり、問題意識をもたらしもの、そしてこれから学習活動が始まっていくきっかけになりはずみになりになるもの」⁽⁴⁾としている。筆者は、これは学習の中で社会的意味(概念)の理解へと発展するものであると考える。

④事象を支える人の営みに気づく目を育てる

社会的な事象、事物の背景には必ず人が介在しているが、便利で早いことが優先される今日の社会構造の中では、子どもにそれが分かりにくくなっている。「物の後ろに存在する人に気づく」つまり人の営みが事象や事物を形成しているという見方を育てることが重要である。③で述べた直接体験を通して、子どもの内面を揺さぶり流動化させ、新たな内面を再構築していくことが重要である。そのような内面の形成こそが、子

どもの地域への思いや願いを形成するに違いないと筆者は思う。そして結果として地域に愛着をもつ人へと成長すると期待する。

4 地域を学習対象とした実践から検証

地域教材の意義を検証するために、奈良県の田原本小学校3年生を対象として筆者が実践した社会科「地域のうつりかわりと人々のくらし」という歴史的な内容の単元を紹介し分析する。奈良県小学校教科等研究会社会科部会の、その当時の研究テーマは『地域社会を大切にしようとする自分なりの考えを持つ子どもの育成』であった。このテーマは、奈良県で教育を受けた児童・生徒が、大学生や働くようになると奈良県から離れるという現象をうけて、奈良を愛し地域に貢献できる人材育成を狙いとしたものだった。さらにこのテーマには、社会科という教科の学習に初めて取り組む子どもたちに、学習の対象として、自分たちが生活する地域社会の様々な事物・事象に対して、自分ごととして切実な問題意識をもって地域の課題に迫ってもらいたいという教師の願いも込められていた。

観察・調査活動等の体験的な学習を通して、どれだけ主体的な追究をすることができるか。さらに、多様な表現を通して自分なりの考えを確かにもつことができるか。その考えを集団の話し合いの中で、より深め、育てることができるか。あるいは、友達の考えに接し、違う見方・考え方があることに気付けるか。といった学習を展開する中で、事物・事象にこめられている地域の人々の願いや努力といった営みを見いだしていくことができるかということを検証することを目的とした実践的研究であった。なぜなら地域社会の事物・事象を追究する中から、地域社会の人々の営みに共感できるような学習を展開することが、自らも地域社会の一員であるという気付きや自覚を育てていくことになると仮定していたからである。

田原本小学校は、奈良県の奈良盆地のほぼ中央に位置する田原本町にある。中世から大和川の水運によって商業の町として栄えてきたところである。しかし、日本の運輸流通の近代化により水運が廃止されたことから、一時的に衰退していた歴史がある。まもなく地域の人々の熱望によって鉄道が引かれ、再びその賑わいをとりもどし、奈良県中部の流通の中心として賑わってきた経過がある町である。

本実践でとりあげた、田原本駅前商店街はこの鉄道が引かれたことによってできあがってきた地域であ

り、それは今から90年くらい前に栄えた地域である。しかし、全国的な交通運輸手段の転換にともない、輸送の手段が鉄道から道路交通へと変化していくにともない、人々の集客地は移動していった。田原駅前商店街もその例にもれず、昭和30年代をピークに衰退を始め、多かった商店もほとんどが閉店し、人通りが少ない商店街になってしまっていた。この駅前商店街の特徴は、以前からの店をやめて『自転車預かり』になっている店が多く見られるということである。そこで、この駅前商店街に14軒(当時)もある自転車預かり店に注目し、その店の変遷を追求することで、駅前商店街の移り変わりとともに、そこで生きている人々の思いに迫り、人々の思いに共感を寄せていくことが、地域社会を大切にしようとする自分なりの考えをもつ子どもの育成につながるのではないかと考えて教材化した。

今回の学習の対象となる駅前商店街は、校区にありながら、子どもたちにとっては、あまり身近な存在ではなかった。2学期に行った消費生活の学習の時にも、この駅前の商店は、消費の対象としてほとんど子どもの意識には登場していなかった。学習前の事前の意識調査によると、子どもは駅前商店街が近くにあることは知っているが、その利用度は低く鉄道を利用する時に通り過ぎる場所という印象が強いことが明確になった。

そこで、筆者は学習に対する内発的なうながしを起すために、子どもたちの好奇心を刺激することにした。教材との出会いの場面で、元々八百屋であった「ヤオギク」という店の名前が書かれた自転車預かりの看板のみのスライドを子どもに提示し、「この店は何の店だろう？」という問いから、授業の導入をした。

学級の児童全員が、看板名から「食料品店」と答えたことは当然の結果である。しかし、次に店の全景を提示すると看板通りではなく、実際は自転車預かり店であるという事実が分かり、多くの子どもたちは驚いて「どうしてだろう？」という疑問をもった。子どもたちは今まで経験で培った既成概念と異なったものに直接的におつかり、身を乗り出してきた。これは単元をつらぬく問いに結びつくものであった。

子どもたちは、多くは視覚で事象を把握するので、今まで自分がなんとなく見ていた駅前商店街が認識の全てである。そこで筆者は好奇心から生じた子どもの疑問に対し、この駅前商店街が時の流れとともに移り変わって今の姿になったということを知るために、駅前商店街の古老から昔の商店街の様子を聞かせていた

だく場を設定した。

子どもたちは、古老から駅前商店街が昔はとても賑わっていたという話を聞き、そして、今の商店街を改めて見つめることで、昔とはずいぶん変わってきているという事実や、実は町を知っているようで気づいていない事実があると強く思ったようだ。そして多くの子どもたちが「なぜ自転車預かりを始めたのか？」という新たな課題をもつに至った。課題を解決するために子どもたちは、グループに分かれて、駅前の商店調査に出かけていった。この時のグループの課題は、『なぜ自転車預かりになったのだろう』というグループと今も残っている『昔ながらの店はどんな店だろう』というグループに大別できる。子どもたちは、それぞれのこだわりを持って自転車預かり店や昔から続いている店へ飛び込んでいった。子どもは時間を忘れ、没頭して追求活動をした。

梶田(2014年)は学習による没頭体験が、子どもの内面に知的なかわきを起すことについて次のように述べている⁽⁵⁾。

そういう場合、子どもは深い深い心理的充足感を味わうはずです。こうした没頭体験は、一種のピーク(頂上)体験と言っているのかもしれませんが、これを体験することによって子どもの内面は深く深く耕されるでしょう。そしてそこから、新たな没頭へのかわきが、生まれてくるはずです。深い充実感のある時間を持つことへのかわきが生まれてくるのです。

子どもは、追求・探求の聞き取り活動の後、そのメモをもとに、話し合い活動の授業に入っていた。この話し合いは、子どもの学びの内的なうながしをさらに深めるものであった。こだわりをもって話し合いをすることが内的なうながしをもたらすことについて梶田(2014年)は次のように述べている⁽⁶⁾。

第2に内的なうながしをもたらすものとして、「こだわり」ということを考えてみたいと思います。子どもが何かにこだわりを持って、そのこだわりを解消するために、いろいろと調べたり考えたり話し合ったりせざるをえなくなる、ということです。こうした「こだわり」は社会心理学で「認知的不協和(cognitive dissonance)」とよばれてきたところと深く関係しています。一人の人の頭の中で、関連する考えやイメージや感情が相互に食い違ったり矛盾したりする状態になりますと、そういった食い違いや矛盾をなんとか解決

し解消しなくては落ち着かないといった気持ちになります。そしてそのために新しい情報を集めたり、今まで自分が持っていた考えや気持ちを変えたり、周りの人と話し合ってみたり、という活動をせざるをえなくなるのです。

その授業の話し合いで、自転車預かり店で聞き取ってきた子どもたちは、店の営みを変えた要因として「後継者がいない」「商売をしている人が亡くなったのでできなくなった」という厳しい現実を発表した。さらにそのような事情を話したがない人もいて「家庭の事情」という理由で聞かせてもらえなかったという発表もあった。現在の「自転車預かりが楽な仕事」かどうかという意見も提案された。そこで「自転車預かりが家で簡単にできる仕事」「元々の商売が儲かなくなって店をやめた」「自転車で来る人が多くなって儲かる仕事」などという聞き取りの結果をもとに話し合っていた。一方、昔からの店を継続している人々へ聞き取りを行った子どもたちからは、「店の誇り」とか「先祖に対して申し訳ない」、「町の景観を守る」ために続けているといった意見が出されてきた。

店を閉めて自転車預かり店にしたのは仕方がないとする意見、自転車預かりは楽なのでよい仕事とする意見、店の誇りや町の景観を守るために店を続けているとする意見、これらは異なる考え方である。筆者はどちらの考え方が正しいとかどちらが誤っているとかというのではなく、どのような視点から考えれば両方の考えが成り立つのかを留意して話し合いを指導した。そうすると子どもは頭の中に矛盾する二つの考えを置いて、どちらの考えも成り立つ新たな視点を探し始める。この矛盾を前にして新たな解決に至るまで考えることは、意識するかどうかは別として、解決への努力が頭の中で持続することになる。これが最近盛んに言われているアクティブ・ラーニングの一つである。アクティブ・ラーニングと聞くと、ともかく体を動かすこと体験することにより学ぶことをイメージしがちであるが、実は頭の中での思考がアクティブになることを狙いとしたものである。

ここで、子どもたちの駅前商店街の自転車預かりや昔からの店、そしてそこに生きる人々への見方や考え方について明らかにするため、この場面の授業記録を提示する。

『ねりあい』の場面の授業記録抜粋(Tは教師、その他

は児童)

— 前略 —

T：どうして自転車預かりになったんだろうか。
まず、このことについて考えていきたいと思います。
じゃ、意見のある人。

A：問屋のままだと、古い、古そうに見えるし、うつりかわってきたら、だんだんきれいな店とか出てきて、なんかきたないなあと思って、買いにくる人が少なくなるから。

B：うつりかわっていくには何かがあった。

T：何かって何。

B：たとえば、一二三の自転車預かりだったら、筆筒屋をやっている、主人が亡くなってできなくなって、お菓子屋さんをやったけど、スーパーができて売れなくなったから困るので、自転車預かりになった。

C：調べたことで、一番多かったのは、病気になってできなくなったということ。

T：できなくなったというのは、何が。

C：店が、だから、やる人ができなくなって、そして、だから店の主ができなくなってやめて、自分ちの店を自転車預かりになった。

D：新尾で、おばさんにきいたんだけど、昔、お菓子屋とかしてたけど、お菓子がくさってきたりして、頑張っても、頑張っても、お金がどんどん減っていくばかりだから、人口が増えてきたから自転車預かりがよい商売だから変えた。

E：今の時代にあってきているから。

T：どうして人が増えると自転車預かりになるの。

F：駅に来る人が多くなって、自転車で来る人が多くなって、それで自転車預かりになっていった。

G：遠くから来る人が自転車で来るから、自転車預かりが増えた。

H：自転車預かりをしていると、もうかるし、楽だから。

I：それだし、朝の運動にもなる。

J：新尾さんが言っていたけど、筆筒からお菓子にして、なんで自転車預かりにしたかということ、毎朝早くから、健康で、いつも自転車を動かしたりするから、健康で、儲かるからしていると言っていました。

D：人口が増えたというのは、駅にぜんぜん近い人が、そこまで行くのに歩いていたら遠いから、そこまで自転車で行って、そこから自転車預かり店に自転車を預けて、そこから駅に行くから。

T：駅に来るということは、駅前に人がいっぱい来るっていうことでしょう。

K：駅前に来たんじゃなくて、駅に乗りよきた。

J：間井谷さんは、おじいさんが散髪屋さんをやっていて、おじいさんが年をとってできなくなった。

T：他に。

A：聞いた時に思ったんだけど、家庭の事情ってなんだったんだろうと思って、きいたんだけど、教えてくれませんでした

E：家族が少なくなって、後を継ぐ人がいなくなってできなくなった。

T：こんな理由をみんな聞いてきたんだろう。今まで聞いた中で分かんないなあっていうことがある。

J：楽な仕事じゃなくて、健康って言ったんじゃないですか。それで、楽な仕事じゃないと思います。毎朝早くから、自転車を動かすために、働いて、しんどいと思います。

L：J 兄さんに反対します。毎朝、早くから起きたら健康にいいと思います。

H：僕は、年寄りでも、毎日朝早く起きてて、だいぶしんどいと思います。

J：それで自転車によって、重い自転車と軽い自転車があるし、毎日自転車を奥の方へ入れたら、表の方へ出したりしています。だから楽な仕事だとは思いません。大変だと思います。

M：でも、お店の人は楽な仕事だって言っていました。おつとめにいくのも、お年寄りの人だからしんどいからって、自転車預かりを始めて、楽な仕事だって言っていました。

B：それ、どこの店。

M：青木。

B：青木さんは、二人でできる仕事が、いちばん適当だからって、言っていました。

T：同じ人でも、ちがうことを言う人がいるのかな。どっちが本当かな。昨日、S 兄君たちが、調べに行ってくれたら、また新しいお店を発見してきたんだよね。そしたら、これで自転車預かりは何軒になったのかな。

複数の児童：14 軒。

T：もともと自転車預かりをしていたというお店はどこかな。

N：青木さんのところですよ。

B：全部で4 軒ですよ。

T：残りの10 軒は変わったっていうことかな。

O：ちがう。北村さんもある。

P：北村さんはもともと電気屋さんだった。でも、いつから始めたかは分からないでしょう。

T：そうか。じゃ、こうやってどんどんどんどんうっりかわってきているんだね。ところが昔から、50 年以上も昔からお店を続けている所もあるんだね。それじゃ二つ目、どうして、昔からのお店は移り変わらないんだろう。二つ目の問題だよ。このことについて、調べたり、意見がある人、言ってください。

E：亡くなったとか、死んだとか言っているけど、その店は大切な店だからやっていると思います。

Q：その死んだ人とかに悪いと思っている。

K：そのお店を継いでいる。

E：亡くなったり、病気になったりした人がいなかった。

R：店を継いでいるっていうことで、森本商店は、ご先祖様のお菓子屋さんを、昔お菓子屋さんをしていて、そのあとを、ご先祖さまが死んだりして、その、その人が、あの、続けて、ご先祖さまが始めはった店を続けている。

L：薬屋としての誇りがあるって言っていました。

T：誇りって分かる。

R：誇りって、その店の使命。杉本薬局とかの薬屋をしなくてはいけないという気持ち。

G：おうぎ屋さんは、町の景観を守るため。

T：町の景観って何ですか。お巡りさんじゃないですね。

G：景観って、何ですかって聞いたら、教えてくれなかった。

T：それじゃしょうがないなあ、先生が説明しようか。この写真を見てごらん。

- 写真を見せながら、昔からの町並みの説明をする -

O：駅前からちょっとだけ離れているけど天野薬局は二代目の人がいるからですよ。

G：持っている家は借家だから。

R：借家っていうのは、借りている家ですよ。

T：移り変わった訳は、こんな訳、移り変わらない訳はこんな訳、それじゃ。

J：薬屋としての誇りがあるんだけど、それもあると思うけど、自転車預かりの人たちの誇りはあるけど、できないんじゃないですか。

T：どうしてそう思ったの。

J：それは、薬屋としての誇りがあるんだったら、他の食料品店だったら、その誇りがあると思います。

T：そうか。でもできない訳があるんじゃないかなっていうんだね。そうか。みんなでこのことも考えてみようか。今までは、自転車預かりと昔からのお店に分かれて調べてきたけど、じゃ、自転車預かりの人たち

は、喜んでるんだらうか。そして、昔からのお店の人は、何も心配していることはないのだから。考えて、それをワークシートに書いてください。

※それぞれにワークシートに考えを書く

T：どんなふうに考えたか、言ってもらおうかな。

K：自転車預かりの人は喜んでると思います。訳は、自転車をあずける時間と取りにくる時間が決まっていると思うからです。朝預かって、取りにくるまで休めるからです。

H：喜んでないと思います。せっかくやっていた店をやめてしまって、自転車預かりになってしまったからです。

M：私は喜んでる人と喜んでない人とが、半分半分だと思います。喜んでるのは、健康でお金も入るからいいと思ってると思うけど、喜んでない人は、前の店をずっと先祖から続いているのに、やめてしまったからです。

T：なるほど、いろんな考えが出ましたね。他にもいっぱい考えがあると思います。次の時間、みんなの考えを出し合っていきたいと思います。

※この時間の後、数人が、再度聞き取りに出掛けていった。

ここで、「店に対しての誇り」について、自転車預かりの人たちだって誇りがあったんじゃないか、でも、自転車預かりにならざるを得なかった理由があるのではないかという考えが出された。そこで、「自転車預かりの人たちは喜んでるのだから」「昔からの店の人に心配はないのか」という発問を行い、児童の考えを揺さぶってみた。そして、それぞれの児童に考えをもたせていった。

その問題を解決するためには、聞き取りにいくしかないのだから、再び、子どもたちは駅前商店街へと出かけていった。そこで、自転車預かりの人たちは「プロ」としてこの仕事に取り組んでいるという姿を発見したり、昔からの店の人も、店の改装や客を増やす努力をしていたり、馴染みの客を大事にしていたりしているという姿を見つけ出してきた。

駅前商店街の人々は懸命な努力をしているということに子どもたちは気づき、その姿に共感を寄せていった。その一方で、果たしてこのままの状態で駅前商店街はいいのだからという考えをもつ子どもたちも出てきた。そこで、新たな課題である『駅前商店街に明日はないのか』という問題について考えていった。結論から言うと、悲観的な見方が多かった。駅前を通り

過ぎる人ばかりが増えても、賑やかな駅前商店街にはならないと考えているからである。ある児童は「自転車預かりがどんどん増えていって、ほとんどのお店が自転車預かりになったら、駅に近くない人が自転車に来て、駅前の自転車預かりに自転車をとめて、ちがう町に行って、この町はいいなあ、駅前もいいなあと思って、そこへ引越をして、どんどん（人口が）減ってしまうかもしれない。商店街がさびしくなって人がいなくなる。そして、田原本の人口が減っていくと思う。」と書いていた。このような捉えをしている子どもはとても多かった。しかし、この問題は子どもが解決できる問題ではなく、大人の街づくりの課題である。ここで、商工会青年部に「未来の田原本駅前」という構想があることを提示し、商工会の人にその夢について語ってもらう場を設定した。児童は、駅前商店街について自分たちと同じように考えている大人がいることを知り、とても喜んだ。商工会青年部の人たちが「何十年先になるかわからないけど、こんな田原本にしていきたい。そのためには、おっちゃんたちからみんなへバトンを受け渡していかなきゃならない。」と夢を語ってくれたことが、子どもたちの心に響き、自らの学びの達成観や効力感を味わうことができたと考える。梶田(2014年)はこの達成感や効力感が、子どもの学びにおける内的うながしへの影響について以下のように述べている⁽⁷⁾。

内的うながしを生み出すうえで大切なポイントとして、3番目に達成感・効力感のことを考えておかないではならないでしょう。「アア、自分にもできたんだ」「自分も頑張れば頑張っただけのことがあるんだ」という体験をすれば「また、次も頑張ってみよう」という気持ちになります。だからどこで、どういう形で達成感・効力感を味わうかが大切になります。この点で工夫をいろいろとしなくてはなりません。

この学習を通して、児童は懸命に生きる地域の人々の姿に触れ、地域社会の一員として、よりよい田原本を願う姿を見せてくれたように思う。これが地域社会を大切にしようとする自分なりの考えをもつ子どもの育成につながると考える。

5 次期学習指導要領の方向性

平成28年8月1日に文部科学省は、次期学習指導要領の審議のまとめ案を公表した。そこでは、グロー

バル化や人工知能の進化など、社会の加速度的な変化を受け止め、将来の予測が難しい社会の中でも、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子どもたち一人一人に育む教育を実現すること。“より良い学校教育を通じてより良い社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、学校と社会が連携・協働しながら新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現すること、そして、これまで改定を中心だった「何を学ぶか」という指導内容の見直しだけでなく、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」という視点から学習指導要領を改善することが示された。併せて、今時の改定においては学習内容の削減は行わず、知識重視か思考力重視かといった二項対立的な議論に終止符を打つことも示されている。

具体的には、すべての教科において、その教科を学ぶことでどのような資質・能力が身に付くのかを(1)知識・技能(2)思考力・判断力・表現力(3)学びに向かう力・人間性の涵養の三つの柱に沿って明確化し、教育目標や教育内容として盛り込むこととしている。そして、思考力・判断力や表現力は主体的、協働的な問題発見、解決の場面を経験することで磨かれることや身に付けた知識もこのような学習経験の中で活用することで定着することから、各教科の特質に応じて「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の視点から授業改善を図ることと教科横断的な視点で教育内容を組織的に配列する「カリキュラムマネジメント」を重視することとしている。

6 次期学習指導要領における小学校社会科と地域の教材化

次期学習指導要領における小学校社会科については、学習内容は基本的に変更されない見通しである。しかし、次期学習指導要領の方向性を受けて、その目標は大きく変更されることになる。現行と次期学習指導要領の二つの目標を、以下に比較する。

現行学習指導要領の小学校社会科の目標

- ・社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

次期学習指導要領の小学校社会科の目標(案)

- ・社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり、解決したりする活動を通して、グローバル化

する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり養う。

①地域や我が国の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して、社会生活について理解するとともに、調査や諸資料から情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

②社会的事象の特色や相互の関連、意味について多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、思考・判断したことを適切に表現する力を養うようにする。

③社会的事象について、よりよい社会を考え課題を意欲的に解決しようとする態度を養うとともに、多角的な考察や理解を通して涵養される地域社会に対する誇りと愛情、我が国の国土や歴史に対する愛情、地域社会の一員としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さの自覚を養うようにする。

次期学習指導要領の目標(案)においては、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり、解決したりする活動を通して」と社会科の特質を踏まえ、どのように学ぶかを示し、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」と、加速度的に変化する社会において育成すべき資質・能力を育成することを示している。さらに、その資質・能力については、①で知識・技能を、②で思考力・判断力・表現力等を、③で学びに向かう力、人間性等を示している。この示し方は、社会科に限らず、すべての教科において共通するものである。すなわち、次期学習指導要領の方向性を受けての記述である。

無論、社会科の究極の目標である公民的資質の基礎を養うことに変わりはないが、時代の要請を受け、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる」と、その公民的資質について新たな規定を加えている。

小学校社会科において、学習内容に変更がなく、目標の在り方がグローバル化をはじめとした、これからの見通しをもちにくい、変化の激しい社会にあって、主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を養うことである。子どもたちが学習の対象である社会的事象に対して、自分ごととして捉え、主体的で対話的な学びを行い、社会的事象の背後にある人々の営みや願いについて思いを致し、共感的に理解をすることが必要であ

る。このことにより、社会科における深い学びが実現する。

さらに、平成27年3月に教育再生実行会議の第六次提言「『学び続ける』社会，全員参加型社会，地方創生を実現する教育の在り方について」で「教育がエンジンとなって『地方創生』を」と提起している。これは、学校教育において地域の課題解決に貢献できる人材育成することについて提言したものであり、具体的には、持続可能な地域を創世していくためには、一人一人が地域社会の一員としての自覚をもって地域の諸課題に目を向け、それらの解決に向かっていく社会人の育成が必要になる。まさに、次期学習指導要領社会科のめざすところと轍を一にしている。

そして、そのめざすところは、田原本小学校での授業実践の中で、子どもたちが見せた、地域社会に見られる課題に対して、関心を持ち、その課題について、自分ごととして調べ、考え、話し合い、自分の考えを確かにしていくという姿であると考ええる。

このような課題に向き合うためにも、子どもたちが社会的事象を自分ごととして捉え、具体的に観察・調査を行うことが可能であり、背後の人の営みや願いが見える地域教材を活用することは極めて重要であると考える。次期学習指導要領の趣旨をふまえながら、これまで以上に地域教材を取り上げた社会科学習の充実を図ることについて提起していきたい。

そして、極めて今日的な現代社会の課題解決のため、社会科創設時に高らかに宣言された「社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を養成することである。」⁽⁸⁾ という社会科の原点を忘れることなく社会科学習を進めていくことが求められていると筆者は考える。

【注】

- (1) 若狭蔵之助 「問いかけ学ぶ子どもたち」(1984) あゆみ出版 P40
- (2) 鈴木正気 「川口港から外港へ」(1987) 草上文化 P186
- (3) 「第32回全国小学校社会科研究協議会研究紀要」(1994) 奈良県小学校教科等研究会社会科部会
- (4) 梶田叡一 「内面性の人間教育を」株式会社 ERP (2014) (5) P91 (6) P104 (7) P106
- (8) 学習指導要領 社会科編(試案) 文部省(1947)

【引用文献】

- ・梶田叡一「内面性の人間教育を」株式会社 ERP 2014

(1) p 91, (2) p104 (3) p106

- ・学習指導要領 社会科編(試案) 文部省 1947
- ・鈴木正気『川口港から外港へ』草上文化 1978
- ・若狭蔵之助『問いかけ学ぶ子どもたち』あゆみ出版 1984

【参考文献】

- ・次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)(総論部分) 2016
- ・次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)(社会科, 地理歴史, 公民) 2016
- ・石井重雄『地域に学ぶ社会科』岩崎書店 1985
- ・長谷川正『社会認識を育てる授業の創造』東洋館出版社 1990
- ・小学校学習指導要領解説 社会編 文部科学省 2008
- ・『第32回全国小学校社会科研究協議会 研究紀要』奈良県小学校教科等研究会社会科部会 1994
- ・『第62回奈良県小学校社会科研究大会 研究紀要』奈良県小学校教科等研究会社会科部会 2015
- ・「『学び続ける』社会，全員参加型社会，地方創生を実現する教育の在り方について(第六次提言)」教育再生実行会議 2015